切支丹本における連体節の主語表示について

木　之　下　正　雄

I

主語といわれるものには，(1) 題目として提示されたものと，(2) 事物が，動作の主体や判断・情意の対象であることを示すもの，つまり述語の意味とだけ関係するものとがある。(1) の，何を題目とするかは表現の問題で，話手の主観に属する。ハを主とする係助詞で表示する。(2) は素材間の関係で，客観的であり，客語・補語が用言の意味と関係するのと同じ性質である。助詞ナシ・ガ・ノで表示する。素材間の関係は唯一で，したがって表示法も唯一であるべきだと考えられるのに，主語に助詞ナシ・ガ・ノ，客語に助詞ナシ・ヲのように，幾通りもの表示法がある。それについて，咏嘆・尊卑・主従・連体語等の諸説がある。

咏嘆説は，主語または客語を表示する役目は助詞ナシが果たすので，ガ・ノまたはヲはそれ以外の，咏嘆の意味を付け加えるのだというのである。これは，主語（客語）と用言の関係は唯一であり，したがって表示法も唯一であるべきだという考えに立脚する。(註1)

しかしこれは次の疑問を説明できない。

(1) 終止文の主語表示と連体節の主語表示とはいつの時代も違っているが，連体節の主語が終止文の主語より咏嘆的であるべき必然性はない。現代語の言い分けも咏嘆の違いによるものではない。

(2) 連体節の主語表示にはいつの時代も，終止文系統のものと連体語系統のものとがあるが，咏嘆の違いによるのではない。

これが説明できなければ咏嘆説は成立しがたいであろう。

尊卑説は，元来ガ・ノの連体語表示の場合の説であるが，主語の場合も尊卑の別があったという説である。切支丹の文典にそう述べてあり，古典文学大系「平家物語」(445 ぺ) にも，「ノとガが主格を表わす場合も全く（属格の場合と）同様な（尊卑の）区別があった」と述べている。

しかしこれは次の疑問を説明できない。

(1) 同様な語にガもノも付く。

件の狼がゐたを（イ 468），この狼の隠れた処を（イ 464）

奥な石に五つの文字があったを（イ 420），

その所に棺のあったに（イ 419）

(2) 尊卑感は終止文主語にもあるはずだが，それにはガを用いてノを用いない。

(3) 助詞ナシと尊卑感の関係が説明できない。

(4) これと同様な違いである助詞ナシとヲの違いに適用できない。

ガとノに尊卑の別が感じられたのは確かであるが，もっと別の，そして恐らくもっと根本的な要因があると思われる。

咏嘆説と尊卑説が，主語述語関係以外の，外部からの意味付加説であるのに対して，主従説とノ連体語説とは，主語述語二成分間の結合関係によると見る説である(註2)。主従説は連体語の場合の立論であって，主語述語の関係を主従で説明することは適切でないことが多い。ノ連体語説は，ノが付いたものはすべて連体語だと見る説であるが，やはり主語と見るべき場合を認めねばならない。そして助詞ナシの場合と客語とに適用できないのも難点である。

表示法が幾通りもあることについて，私は主語述語の結合の度合いによるのだと思う。主語の係る力が述語まででとまって主語述語が対立的に結合するものと，さらに下に係るために主語と述語が融合的に結合するものとの間に段階があるのだと思う。昨年の研究紀要で，現代語の連体節のガ・ノの使い分けは，そうした結合の度合いと話手の傾向によることを述べた。切支丹本における終止文主語の助詞ナシとガの別については別の機会に述べたい。ここでは切支丹本の連体節における助詞ナシ・ガ・ノの使い分けが，やはり結合の度合いによること，したがって室町時代の連体節は，平安時代の助詞ナシとガ・ノの二段階から現代のガとノの二段階に移る過渡期として，助詞ナシとガとノの三段階であったことを考えてみたいと思うのである。

II

採りあげた切支丹本は，天草本平家物語（略号「平」）の巻一と巻四，イソポ物語(略号「イ」)，金句集の「心」（略号「金」）である。連体節の範囲は，体言に係る連体修飾節と準体言節で，準体言節には「如し」に係るものを含む。連体語，性状語は次の理由で除いた。

甲　連体語について　「体言ノ―活用語の連体形―（体言)」の構造で，連体形が前の体言の動作・性状である場合に，連体形が，前の体言の述語であるものと，単に後の体言の修飾語であるものとがある。前者は連体節であるが，後者は連体語である。連体語には次のようなものがある。

A　同　　格

a 1　人の栄ゆるを本にし欲を構ゆる者は（金 282)

「Sノ―pスル―S′」の構造である。S（人）とS′（者）とは同じ事物をさす語であり，pスルはS（したがってS′）の動作である。しかしここではSガpシタという事象を述べたのではない。pスルという動作概念をもってS′を限定した名詞句を，英語の関係代名詞的に，初めに提示したSに添える言い方である。S′は，英語の関係代名詞がそうであるように，漠然とした，外延の大きい，Sを包摂する語である。

b 2　ロバの見苦しげな（モノ）に重荷を負ほせて（イ 459)

3　文袋を首にかけた僧の芦毛の馬に乗って馳せ来る（僧，またはモノ）……笠をあげて招いた。(平 391)

aの S′ の省かれた構造である。現代語でもノを用いてガを用いない。これは次の例と識別しにくいことが多い。

4　その所に棺のあったに七つの文字を刻うだ。（イ 419）

bの構造にもとれるが，「その所に」の関係から主語述語にとって，「その所に棺があった―ソノ棺に」ととって，準体言節の再格に入れた。次の例と同じ構造と見るわけである。

5　奥な石に五つの文字があったをイソポが見ていふは（イ 420）

B　狭義の連体語

a 6　他（人）のよいことをそねむ者は（イ 501）

「Sノ―pスル―T」の構造で，Aと違うところはS（他）とT（こと）が別語であることである。pスルはSの動作・性状であって，「Sノpスル（主述）―T」の場合も「Sノ（連体語）―pスルT（連文節）」の場合もある。例6が「他の―よいこと」の構造であることは，意味の上からと，現代語でもガで言い換えにくいことから了解されよう。切支丹も，

タノ　ヨイコトヲ　ソネム　モノワ（原文はローマ字）

のようにわかち書きしている。「タノ」を連体語と認めたものと思われる。本論でも連体語として，連体節から除いた。

b 7　シカノ　カヨウコトワ（鹿の通うことは）（平 260）

上のようにわかち書きしてあり，松下大三郎博士も連体語と説かれる。「通ふ」は鹿の動作ではあるが，「鹿の，どんなことか」に対する答である。「それはどんなことか」に対する答である，主語述語の「鹿の通う―トイウこと」と同じではない。

8　ヨシツネノ　ミヤコヲ　ヲチラレタ　コト　ナラビニ　ホウジャウノ　ジャウラクノ　コト（平 379）

で，「都を落ちられたこと」は「上洛のこと」に対応し，「義経の」は「北条の」に対応して，連体語と見ることができる。既知の事項である義経を提示して，「それの，どんなことか」に対する答である。このような構造は連体語に見るのが正しいと思う。が，主語の動作であるという意識が作用しやすく，現代語でもガで言い換えることができる。次のcと，表現の重みという主観的な違いがあるだけで，識別しにくいことが多い。一般にも主語と考えられている。それで本論では調査の中に入れた。

c　「雨の降る日」を松下博士は連体語と説かれた。がこれは，「雨」を既知とした「雨の，どんな日か」の答ではなくて，「それはどんな日か」の「どんな」に「雨の降る」という主語述語の句を入れたのである。「鹿の―通うこと」では「鹿の」は「こと」に対応して「通う」より重みがあるが，「雨の降る―日」では，「雨の」は「降る」に従属しそれに融合して「日」の説明をするのである。通説のように主語述語と見るべきである。

a・b・cはともに「Sノ―pスル―T」という構造であるが，a・bは連体語，cは連体節で

あって，a・b・cの順にSの重みが減ずる。が本論では上述の理由で，bをcとともに連体節として調査の中に入れた。

被連体語が省かれた場合も同様である。

9　田舎の君ある（コト）は，都の（君）ない（コト）には劣るぞ（金 277)。

「田舎の」「都の」は連体語で，aの構造である。現代語でもノを用いてガを用いない。

乙　性状語について　主語が形容詞性の述語を伴って一語の形容詞のように機能し，事物の性状を表わすものは，複合語か複合語に近いので，本論では除いた。この性状語を切支丹が次のようにわかち書きしたのは注目に値する。

（A）一綴りにするのが普通のもの

a　連濁するもの

10　ココロヅヨウ（平 308)，ノコリズクナウ（平 285)

b　接尾語サ・ゲが付くもの

11　センカタナサニ（平 236)，ヲナゴリヲシゲデ（平 289)

c　単独には用いられない古語を含むもの

12　ヲモヤセタ(平 308)，トシタケタ（平 428)

（B）どちらの綴りもあるもの

13　ココロ　アル　モ　ココロ　ナイ　モ（平 47)(註3)，トク　アル　モノヲモ　トク　ナイ　モノノ　ヨウニ　モテナセバ（金 98)

14　ココロナイ　コト（平 81)，トクナイ　モノ（金 194)

（C）ノ・ガの付いたものは別綴りにする。

15　ナサケノ　フカイ　ヒト（平 351)，フノ　ワルイ　モノ（イ 494)

平家の前半は概念単位に細かくわかち書きする行き方なのに，例14のように綴るのは複合語と認めたからと思われる。AとCは連濁や接尾語，ノ・ガというような外的徴表を基準として複合語と別語を区別しているが，Bではそのような外的徴表がない。例13では「心」「徳」についてその有無を述べる意識があるが，例14では被連体語に重心があって，「心」「徳」についてその有無を述べるのだという，述語に対する主語意識が稀薄である。そのような場合は主語述語の結合した性状が一つの表象として一語意識が生じ，一語の形容詞のように機能し，一つのアクセント節に発音される。一綴りに表記されたのはそうした一語意識によると思われる。

しかし別綴りに表記されたものは別語と見るべきかというと，そうとも限らない。概念単位の意識が強いので細かくわかち書きしがちだが(初期に細かくわかち書きし,「懺悔録」では再び細かいわかち書きになった)，成句として機能すると見るべき場合が多いからである。ノが付いて別綴りになっているものも，符ノワルイなどは，現代語のダラシノナイなどと同じく，複合語と思われる。とすれば，別綴りになっていることもノ・ガが付いていることも，複合語でないことにはならないの

である。複合語と別語の識別は困難な場合が多いので，本論では性状語を連体節から除いた。

除いた性状語では，助詞ナシが最も多く，次いでノが多く，ガは稀である。複合の度合いはガ・ノ・助詞ナシの順に一般に強くなるのであるが，性状語は複合語か複合語に近いので，表示法がこの順序になるのである。

III 助詞ナシとノ

連体節の主語表示には，終止文的なもの（平安・室町　助詞ナシ，現代　ガ）と連体語的なもの（平安　ガ・ノ，室町・現代　ノ）と，中間的なものとして室町時代のガがある。これは連体節に，終止文的性格のものと連体語的性格のものとがあるからである。

終止文は，主語について，それがどうしたかという，事象を述べて完結することに重心があって，主語と述語とは対立的である。連体節の中には，事象の叙述に重心があって，完結的で，被修飾語から独立的であるものがあり，それが終止文的に表示されるのである。連体語は，特にノの付く連体語は，被修飾語の説明であり，被修飾語に対して従属的である。連体節の中には，被修飾語に対して説明的従属的なもの，すなわち被修飾語に重心があり，連体節は被修飾語によって統合されるので，主語述語は融合的であり，結合が緊密なものがある。以下，どのような場合に助詞ナシが多く用いられ，そしてそれが叙述完結的であるか，どのような場合にノが多く用いられ，そしてそれが従属的であるかを見ようと思う。

A 題　　詞

第1表は連体節が「こと」を修飾した例を実質名詞・形式名詞・題詞に分けたものである。題詞では「主語（助詞ナシ）―何々する―こと」の形式が多く用いられるので，助詞ナシが圧倒的に多い。

第1表　こ　と

	実	形	題
助詞ナシ	1	13	34
ガ	8	22	3
ノ	8	53	4

16　成親卿とその子少将△流罪に行はれたこと（平 53）

17　少将の鬼界が島へまた流されたことをもお語りあれ（平 60）

同じ内容が，題詞では助詞ナシ，客語ではノになる。題詞では，その性質上，主語を卓示して，それがどうしたかを述べることに重心がある。題詞であるために「こと」を添えて体言化するが，軽く添えられるにすぎない。連体節は事象（主体とそれの動作・性状）を完結的に叙述して被修飾語から独立的であるので，「少将……行はれた―トイウこと」のように，「トイウ」を間に入れることができる。主語の係る力は述語までで，「こと」に及ばない。

しかるに例17の客語の場合は，他動詞に係るために「こと」すなわち体言性の方に重心が置かれる。連体節は説明的・従属的であるために，例16のように「トイウ」を間に入れることができない。被修飾語に係る力が連体節を貫徹して主語述語を一体に融合させる。その，融合して被修飾語にまで係る力を示すのがノである。

18　俊寛の悲しみ△ 深いこと（平 69）

非情意語が主語で形容詞が述語である連体節は，主語について叙述することよりは被連体語の従属的な説明であることが多いので，助詞ナシになることが少ないのであるが，題詞の場合は主語として卓示するために助詞ナシになったのである。題詞の中にあっても，「こと」が客語などであって主語を卓示する必要がないものは，普通の文中にあるのと同様である。

19　重盛，父清盛の法皇へ対し奉っての憤りの深いことを諫められ（平 40）

第1表の題詞のガ・ノの付いた用例で，例8の「義経の都を落ちられたこと」や，

20　平大納言の配所に赴かるること，並びに建礼門院の大原へ御隠居のこと（平 368）

が連体語と見るべきことは既に述べた。

21　童の羊を飼うたこと（イ 489）

22　犬が肉をふくんだこと（イ 445）

23　那須の与一が扇を射たこと（平 335）

例21は，例8・20と構造が同じであるが，例22・23と同じく主語と思われる。既知である「童」の，どんなことか，の答でなく，「次の話はどんなことか」の答である。すなわち「…ことニツイテノ話」という，「こと」に重心を置いた言い方なのである。題詞の中には少しはこのような言い方もあったのである。

B　いふは・いふやうは

第 2 表　連体節の用例数

	実	形	準	いふは	いふやうは
助詞ナシ	20	94	38	123	9
ガ	28	60	60	38	4
ノ	66	151	107	28	3

（連体語・性状語・題詞の「こと」を除く）

実質名詞・形式名詞・準体言節では，助詞ナシよりノが多いが，「いふは」「いふやうは」では助詞ナシがノより多い。

「何△ いふは」の型は，次の談話を誰が言ったか，発言者を卓示的に示す場合である。

a　対話の場合は，脚本と同じことで，発言者を示すことが目的であって，「言ったことがどうなるか」という，「こと」の重みはないので，助詞ナシになることが多い。

24　その時イソポかの二人の言ひ様を大いに嘲ったところで，

シャント△ イソポに問はるるは「……」。

イソポがいふは「……」。

シャント△ 怪しうで言はるるは「……」。

イソポ△ 答へていふは「……」と。

シャント△ また言はるるは「……」。

イソポ△ 答へて申すは「……」というて（イ 413），

b　文章の初め，あるいは叙述を新たにする場合は助詞ナシになることが多い。三尾砂氏の「場の文」（現象文）で，場面説明である。対話の場合も場面説明なので，結局前項と同じである。

25　ある狐川端にゐて魚を食するところに，おほかめ△上に臨うでそこへ来ていふは「……」。狐△答へていふは「……」といふ。（イ 466）

26　ここにおいて獅子△狐に言ひやるは「……」（イ 502）

27　ややあって清盛△言はれたは「……」（平 42）

現象文は終止文では，主語を卓示する場合は助詞ナシ，述語に重心がある場合はガを用いる。「いふは」は省かれた体言性「こと」の統合力がないので，終止文と同じ性質である。そして発言者を示すことが目的なのでそれを卓示することが多い。で，助詞ナシになることが多いのである。

c　「……ときに」「……すれば」の次では，どちらも用いる。発言者を卓示する場合もあれば，体言性「こと」を重くする場合もあるからである。

28　パストル「……」といへば，おほかめ△答へていふは（イ 465）

29　かの狼この羊を食らはばやと思ひ，羊のそばに近づいていふは「……」と怒ったれば，羊のいふは「……」と。重ねて狼のいふは「……」。羊のいふは「……」（イ 443）。

例28は，「狼が答えた」という事象を，「狼」を卓示的に記述したのであって，現代語の「狼が答えていうには」という言い方に当たる。例29は，次に述べるように，前の発言に対して「羊のいうことには」というのであって，助詞ナシより「こと」を重くした言い方である。「ときに」「すれば」という状況に対して，発言者を卓示して事象を記述する場合と，発言内容の方に重みを置いて表現する場合とがあるのである。

「何ノ（ガ）いふは」は潜在的な「こと」に重みを置く場合である。

（ア）発言内容に重みを置いて，まず潜在的な「こと」で代行して提示する場合

30　清重というて十八歳になる人御前に進み出て申したは，「親にてござる入道の教へまらしたは『……』と教へてござる」と申したれば（平 259）

31　「好う案内を知った者がござったが申したは，『……』と申す」（平 287）

「入道『…』と教へてござる」なら発言の事実を記述するだけである。ここでは「教えたことには」に当たり，「こと」に重みを置いた言い方なのである。

（イ）前の人の発言に対する後の人の発言内容に関心の強い場合。前記の例29がそうであるが，次の例もそうである。

32　ある医師…気分の趣を問ふに，病者のいふは「……」といへば，医者のいふは「……」と。その翌日……「……」と問ふに，病者のいふは「……」と。またその翌日「……」と問ふに，病者のいふは「……」と。医者のいふは「……」というて去んだ。病者△看病する人にいふは「……」と（イ 474）。

前の発言に対して意外であったり反対であったりする場合なので，後の発言に対して関心が強いの

である。そんな場合，後の発言内容は重みが置かれるので，潜在的な「こと」で代行して提示されるのである。意外であったり反対であったりする場合が多いというのは，ノの咏嘆性のためでなくて，「こと」で代行提示するところが，次の発言内容にそのような予想を抱かせるのである。例32の最後の文が助詞ナシなのは，事象を単純に記述するだけだからである。

bと（イ）によって，「いふは」が並ぶ場合に，最初の発言は助詞ナシで，それの答にはノ・ガが付く用例が多いことになる。

33　イソポ＾荷奉行にいふは「……」というたところで，奉行のいふは「……」（イ 412）

34　ある蝿△蟻に語っていふは「……」と自慢すれば，蟻のいふは「……」（イ 458）

（ウ）幾人かの中で，発言が期待されている場合に，その一人が発言する場合，ガを用いることが多い。

35　渡辺には大名小名寄りやうて，さても船いくさのやうは何とあらうぞ，と評定せられた。梶原が申したは「……」（平 326）

36　鳥類の陣には……とひそめくところに，鷲といふ荒武者が進み出て高らかにいふは「……」（イ 460）

37　その中に二騎進んでみえた。一騎は塩谷，一騎は勅使河原といふものであった。塩谷が申したは「……」（平 239）

（イ）で述べたことと同じく，発言を期待するために発言内容に重みが置かれ，それを代行提示する「こと」に重みが置かれたのである。

以上，「いふは」の型で，助詞ナシは，誰が発言したかという，発言者を示すために主語を卓示する言い方であり，ノ・ガは発言内容に重みを置く言い方である。そして「いふは」の場合には発言者を示すための場合が多いので，助詞ナシの場合が多いのである。

「いふやうは」も「いふは」と同じである。

C　実質名詞

実質名詞の場合は，第2表のように，ノが助詞ナシより多い。実質名詞は，それに重心が置かれ，連体節はそれの説明として従属的である場合が多いからである。現代語も同様の傾向である。

第2表によれば実質名詞の場合助詞ナシになることもある。それは次のような場合で，現代語と同じような場合である。

a　事象を叙述して代名詞で承ける場合

コリヤードの「日本語文典」(17 ペ）に「関係話法（トコロノでつなぐ連体修飾語）は時に（切支丹に？）困難（と共にあいまい？）なるため，説明語によって解説的に述べられる。例へば『今殺されたペドロの子は』といふ代わりに，吾々は『今ペドロ殺されたその子は』と言ふ」とあるのは興味深い。事象を完結的に叙述する方が容易であると感じたこと，その場合助詞ナシに表現していることである。次の例も同じである。

38　所の人々△ わが身を自由になさせられたその御恩賞のかたじけなさを（イ 431）

39　国々の大名小名△ 並みゐたその中で（平 361）

40　大将△ 定めて進み出させられて傾城を御覧ぜられうずるその時（平 335）

b　事象を叙述したものを承ける語の場合

41　老若男女△ よろこびの眉をひらき安堵した有様は（イ 432）

「有様」や例38の「御恩賞」のような語は，意味の性質上，事象を内容とすることが多い。それで連体節は事象を叙述することに重みが置かれるのである。

c　主語を卓示することは，それの動作を述べて，事象の叙述に重みを置くことになる。

42　少将康頼△ 都へ帰らるる道すがらのこと（平 77）

43　生食は自然の事あらうずる時，頼朝△ 物の具して乗らうずる馬ぢゃ。(平 230)

康頼がどうしたか，誰が乗るか，という事象の叙述に重心を置いた表現である。例42が，「どんな道すがらであるか」に重心がないのはいうまでもないが，例43は，「生食はどんな馬か」という，「馬」の説明である。がここでは，外ならぬ頼朝が乗るのだということに重みを置いたのである。

d　対比する場合は主語が卓示される。

44　滝が漲り落ちてその音まことにすさまじうて松風△ 神さびたすまひ（平 66）

45　諸鳥の中より才智能く芸△ 他に優れた人体を王と仰ぎ用ようず（イ 492）

「滝の音」「才智」と対比するために「松風」「芸」を卓示したのである。

e　長文の場合

46　成経△ かの島へ流されて露の命消えやらで三年を送って召し帰さるる嬉しさは（平 78）

47　我らが召し還さるる嬉しさは（平 75）

例47は述語が少ないので被連体語の統合力が強く作用するが，例46では叙述部が長いので，事象の叙述に重心が傾いたのである。

このように実質名詞の連体節も，事象を叙述することに重心が傾くこともあるが，一般的には，実質名詞の説明としてそれに従属的である。で，ノ主語が多いのである。

D　形式名詞

形式名詞には，（甲）統合力の強いもの，（乙）統合力が弱くて連体節が独立的なもの，（丙）意味によって統合力に強弱のあるもの，がある。第3表は統合力の強い形式名詞をあげたものである。

第3表　形式名詞

	やうに	ごとく	うちに	中	限り
助詞ナシ	0	2	0	2	0
ガ	2	2	1	0	0
ノ	7	11	6	5	4

（甲）統合力の強い形式名詞

（ア）やうに

a　比況（マルデ…ノヨウニ）

48　風に木の葉の散るやうに（コノハノ　チルヤウニ）（イ 461）

b　様態（…サマニ，…ヨウニ）

49　徳もない者なれども，もてはやせば徳のあるやうに見え（トクノ　アルヤウニ　ミエ）（金 98）

c　一致（…トオリニ，…ヨウニ）

50　わごぜたちの思はうずるやうに書け（ヲモワウズル　ヤウニ）（平 290）

d　内容（…ヨウニ）

51　この事がほかへ聞えぬやうにせい（キコエヌ　ヤウニ　セイ）（イ 420）

a・bは統合力が強い。切支丹も，動詞（散る・ある）との結合の強さを感じたから一綴りに表記したのだと思われる。dは比較的に統合力が弱いのであるが，助詞ナシになるほど独立的ではない。

（イ）ごとく

「ごとく」の上接の節は「こと」の意味を含む準体言節と思われ，第2表では準体言節に入れたが，「やうに」と意味が同じようなので，ここで取りあげた。

a　比況（マルデ…ノヨウニ）

52　人の身は芭蕉の風に破るるが如くぢゃ。（金 259）

b　一致（…トオリニ，…ヨウニ）

53　尾長鳥のいふ如く賢才によるぞ（イ 493）

c　同等（…ト同様ニ）

54　ざふやくが…孕うでござる如く，かの猫も…（イ 440）

55　（イソポは）見にくいこと△天下無双であった如く，智慧のたけたものも（イ 409）

a・bは「こと」を補って体言化することができる。その体言化のためにノになるのである。cでは「こと」を補いにくい場合が多いが，それは事象を叙述することに重心があるからである。その場合，主語を卓示すれば，助詞ナシになるのである。

（ウ）うちに

（a）私がちょっと油断をしているうちに，…

（b）私の生きているうちに実現されれば…。

現代語で，（a）のように既定の事実の場合は，事実を述べることに重心が傾くので，終止文の主語ガになり，（b）のように将来あるいは一般的な場合は，限定する時間の方に重心が傾くので，ノになる。切支丹本にあったのは（b）の場合だけで，ノばかりである。

56　人は力の尽きぬうちに（イ 465）

57　しかけた事のすまぬうちに（金 160）

第3表のガ1例は，代名詞であるために用いられた用例である。

58　わがまだ生きてゐるうちに（イ 425）

（エ）中・限り

59　松の一村ある中に（平 78）

60　某の命のあらう限りは（平 257）

ノが多く用いられる。第3表の「中」の助詞ナシ2例は上記の例39のように，代名詞で受けた例である。ノ主語の「中」は空間的な場合であるが，助詞ナシの「中」は数量的な場合で，どのような人々の中であるかを表わす。そんな場合は，人々の行為を叙述することに重心を置きがちで，連体節は完結的・独立的になり，代名詞で承けることが多い。空間的「中」は統合力が強いのであるが，数量的「中」は統合力が弱い。その場合助詞ナシになるのである。

（乙）統合力の弱い形式名詞

（ア）ところで

イソポの「ところで」は用例11，内助詞ナシ6，ガ5で，ノの用例はない。「ところで」は，上接の節で事実を述べて，それが後件の原因であることを示す。現代語のノデに当たる。体言性は失われて上下を接続するだけなので，上接の節は終止文と同じである。それでノがないのである。本論では，接続助詞として，連体節の統計から除いた。

（イ）ものぢゃ

a　Sハ―pスル―モノヂャ

61　人は賢だてをしてしそこなふものぢゃ。（イ 494）

b　Sハ―Aガpスル―モノヂャ

62　遠慮のない者は必ず近い憂があるものぢゃ（イ 411）

63　常に虚言をいふ者は，たとひまことをいふとも，人が信ぜぬものぢゃ（イ 490）

c　Sハ―pスルコト△bナル―モノヂャ

64　人をたばからうとする者は，結句人よりたばからるること△多いものぢゃ（イ 496）

Sハは題目であって，それに応ずる述語はモノヂャであり，pスル，Aガpスル，pスルコトbナルは，Sハの述語ではなくて，モノの修飾語である。例63の「者は」は「信ぜぬ」の対象であって主語ではなく，モノヂャに対する題目である。したがって「人が信ぜぬ」がモノに対する単なる連体節であることは明らかである。

しかし連体節の部分は題目に対する判断の実質的内容で，総主語文における述語節と同じであるが，モノヂャは，題目が一般的に斯うであると判断をしたということを示すだけの従属的な役割りをするにすぎない。現代語のノダと同じ性質である。それで，連体節の判断に重心が置かれて，モノヂャの統合力は弱い。それでb·cの連体節の主語は，述語節の主語と同じようにガになることが多いが，pスルコトを卓示する場合は助詞ナシになり，次のようにモになることもある。

65　（ソンナ人ハ）身の置き所もないものぢゃ（イ 484）

が，ノになることはない。で，体言性を失っているものと見て，モノヂャも連体節の統計から除

いた。

（丙）意味によって統合力に強弱のある形式名詞

（ア）　儀

66　田園△悉く一家の進退となった儀は（平 46）

67　このつれの返事は田夫野人の申す儀ぢゃ（イ 416）

前者では，連体節は「儀」の内容である事象を完結的に叙述する。トイウを間に入れることができる。「儀」はそれを体言化して下に続ける役割りで，従属的である。後者では，「儀」は「返事」に対応する体言性の強い語であり，連体節はそれの従属的な説明である。トイウを間に入れることができない。このように「儀」は，連体節に従属的な場合と，「儀」の方が主要な場合とがある。

（イ）体（態）

68　北の方以下の女房たち△声も惜しまず泣き叫ばるる態，誠にあはれにあった。（平 33）

69　四つの足の影のもの弱げに，しかも蹄の割れた体を見て（イ 462）

70　幼い人々の余りに恋ひ悲しまるる態（平 63）

例68は事象の叙述に重心を置いて「態」の内容としたものであり，69は「体」の状態を述べたもので従属的である。70は「態」に重心があるが，実際は「人々の」は連体語と見るべきものである。「体」は「儀」と性質が同じようで，用い方も同じようである。

（ウ）こと

「こと」は，実質名詞・形式名詞・題詞に用いられた形式名詞　とに分けられる。第1表のように，実質名詞では助詞ナシが少なく，題詞ではノが稀である。それについては既に述べた。普通の形式名詞では，事象を一旦叙述してから，題目とするために「こと」で体言化する場合は助詞ナシになる。トイウを間に入れることができる。題目として卓示する場合に多い。題詞の場合もこれに属するのである。

71　かの鷲△守護の指金を奪ひ取る（トイウ）ことは余の儀ではない（イ 427）

それに対して，連体節の叙述を直ちに体言化する場合は，「こと」の統合力が強く作用し，トイウを間に入れることができない。この場合はノ・ガになる。主語・客語になる場合に多い。

72　賢主はすぐれたる臣下のほろぶることをば…惜しがる（イ 434）

73　その方の来たこともただ夢かとばかり思ふ（平 87）

（エ）と　こ　ろ

第 4 表　と　こ　ろ

	実	（トコロ	―ヲ	―ヘ	―ニ）
助詞ナシ	4	1	4	4	19
ガ	2	3	2	0	2
ノ	18	5	2	0	1

「ところ」は，実質名詞・形式名詞（トコロ・トコロヲ・トコロヘ・トコロニ・トコロデ）がある。トコロデは接続助詞と見るべきことを前に述べた。それ以外の「ところ」の用例数は第4表のとおりである。

74　さては天の与ゆるところぢゃ（イ 459）

75　万民の指すところは違はぬものぢゃ（金 230）

トコロノモノの意味の「ところ」は，統合力が強くてノになることが多い。助詞ナシの1例は

76　頼朝△ 聞召されう所もおそれでござれば（平 390）

「頼朝が聞く」ということに重みを置いた言い方であるからである。例43と同じである。

77　獅子王△ 振りあげて見るところを（馬）したたかに踏めば（イ 459）

78　ある時シャント△ 沈酔してゐらるるところへ人が来て（イ 417）

79　法皇△ 笑壺に入らせられ，「…」と仰せられたところに，康頼…（平 19）

ヲ・ヘ・ニは後の動詞に応ずる格助詞であるが，トコロヲ（ヘ・ニ）で上下の事象がどんな状況的関係にあるかを示す。それで，連体節は事象を叙述することに重心が置かれ，「ところ」の統合力は弱い。殊にニは意味が広くて後の動詞を規定する力が弱いので，トコロニは最も統合力が弱く，接続助詞に近い。トコロデはさらに弱くなって，接続助詞になったのである。

（オ）とき

80　ある鼠△ 獅子王の上にとび上った時，獅子王…（イ 451）

81　皆人も忠盛の面目を失はれた時は，気遣ひを致された（平 7）

82　言葉の行蹟にたがふ時は，人が…（イ 502）

例80では前件後件に余り軽重の差がなく，前件でも事象の叙述に重みが置かれるが，例81・82では後件に重みがあり，前件は「時」の説明であり，「時」に重心がある。前者では「時」を用いることが多く，後者では「時に」「時は」が多い。前者では前件の主語は後件の主語と対比的に卓示することが多く，後者ではそうでない。それで第5表のように，「時」は助詞ナシが多く，「時に」「時は」はノ・ガが多い。

第 5 表　と　き

	時	―ニ	―ハ
助詞ナシ	15	0	5
ガ	4	1	3
ノ	6	1	10

（カ）ほ　ど

「ほど」は，上下の事実が順接関係にあることを示す「ノデ」と「間」と「程度」との意味がある。第6表のように，接続助詞的なノデの意味の場合は助詞ナシが多く，体言性の強い「間」「程度」の意味の場合はノが多い。

第 6 表　ほ　ど

	ノデ	間	程度
助詞ナシ	5	3	4
ガ	3	2	2
ノ	1	5	8

形式名詞は，第2表のように，比較的にノが多いのであるが，助詞ナシも多い。どちらを用いるかは語によって意味によって違うのであるが，それは，統合力が強いか弱いか，連体節が独立的であるか従属的であるか，に基因するのである。

E 準体言節

準体言節も，潜在的な体言性の統合力に強弱がある。同格は連体語なのであるが，準体言節と関

第7表　準体言節

	同格	代行 再格	代行 被連体	体言性 現象	体言性 概念
助詞ナシ	1	16	2	17	3
ガ	0	28	12	9	11
ノ	20	22	19	1	65

係が深いので，表に入れた。

同格はほとんどノである。助詞ナシは，

83　小松の三位中将の若君△今年は十二にならせらるるが，世に美しうござるを（平 386）

のように，言いさして説明を補うような場合である。

準体言節は準体助詞ノに当たるものが潜在するのであるが，そのノが体言を代行する場合と体言性を与える場合とに分け，それを「再格」「被連体」「現象」「概念」に分けた。

（ア）再　　格

84　おのれの影の水に映ったを見て（イ 462）

85　貞能がそこへ参ったに「…」と（清盛が）いうて（平 28）

86　胸板の金物△少しはづれて見えたを隠さうとて（平 44）

これは，単純な修飾語として，「水に映ったおのれの影」「そこへ参った貞能」「はづれて見えた胸板の金物」とも言えるのであるが，それを主語述語の形式で言い，その代わりに被修飾語を省いたものである。同格と紛らわしいが，主語述語関係の意識があり，現代語でガで言い換えられるものを準体言節とした。

前例は主語が再格に立つ場合であるが，客語や補語が再格に立つ場合もある。

87　その中に雁一つとびあがって…玉章を食ひ切って落いた（玉章）を官人これを取って（平 69）

88　その場にところの検役が坐せられた（場）に鷲一つとんで来て（イ 425）

89　めのと（子どもを）抱いて参った（子ども）を，少将膝の上に置いて（平 57）

また，省かれた被連体語を代名詞で代行する場合がある。例87がそうであるが，

90　かの獣のわれに教訓をないた，それ（教訓）を何ぞといふに（イ 471）

91　右の狐△…進退してゐたを，共にこれ（狐）をも打ち殺いた（イ 501）

準体言節ではないが，C実質名詞のaのコリヤードの例文や例39も，連体節の主語を代名詞で代行するところは同じである。

準体言節に付いているヲ・ニ・ガは格助詞で，下接の動詞との関係を示すためのものである。しかるに準体言節が事象の叙述に重みを置くと，潜在的な被連体語の体言性が弱くなり，ヲ・ニ・ガが格助詞だという意識が弱くなって接続助詞的に感じられる。それで下接の動詞に対して格表示のための代名詞をさらに置くようになる。例87，91がそうである。これらの例のように，ヲ・ニ・ガの後にさらに代名詞を補う準体言節は助詞ナシになることが多いのである。しかし例90のように格助詞の前に代名詞を用いたものは，「教訓」を卓示するためで，「かの獣の」は「それ」に係る力を保っているので，ノ主語になったのである。

このように再格は，単純な連体語でも表現できる事を，主語述語として表現しようとするものである。そして事象の叙述に重心があるものと，潜在的な被連体語に重心があるものとがあるので，第7表のように，再格は助詞ナシ・ガ・ノのどれもが用いられるのである。

（イ）被　連　体

92　それがしの食ひ残いた（食物）をば何として参らせうぞ（イ 466）

93　有王が申す（言葉）に違はず（平 89）

カッコ内のような被修飾語が省かれた場合である。（現代語ではむしろ実質名詞を用いる方が自然であろう）。多くは客語か補語になるべき語である。実質名詞が顕在する場合と同じく，潜在的な被修飾語に重心があって，ノになることが多い。

（ウ）現　　象

94　楽しみ尽きて悲しび△来たるは世の習ひでござる（平 364）

「……悲しび来たるトイウコトは」と言えて，準体言節は，完結的に叙述したものに体言性を与えたものであることは明らかである。これは普遍的事象を述べたものであるが，一回的な事象を述べた次のような例も，完結的に叙述したものを体言化したものである。

95　かの狼△あはれといふもおろかな体で過ぎ行くを（狐が）見て（イ 468）

96　何とやら世上が物騒がしうござったを，……と思うて（平 35）

「コト」「ワケ」「様子」などの語を補い得るが，「被連体」と違って，下接語との関係のために体言性を与えたものである。しかし次の「概念」のように動作・性状そのものの概念ではなくて，事象を一旦叙述してそれを体言化したのであって，叙述全体を総括し得るような語「コト」「ワケ」「様子」などを補い得るのである。「過ぎ行くが，ソノ様子を」という言い方に当たる。しかしヲ・ニ・ガなどが接続助詞でないことは，例95の「過ぎ行くを見て」によっても明らかである。が，叙述内容が完結的であるので，第7表のように助詞ナシになることが多いのである。

（エ）概　　念

97　重盛の子どもとてあらうずる者の…馬より下りぬ（コト）こそ尾籠にござれ（平 16）

98　理の高ずる（コト）は非の一倍（イ 481）

99　命の惜しい（サ・コト）も，父を今一度見たう存ずる故ぢゃ（平 40）

「下りぬ」動作そのものを体言化したもので，英語の動名詞に似ている。それで主体である「者の」は連体語なのである。しかし「命の惜しい」のように，総主語文における述語節に相当するものは主語述語である。しかしこれは，主語について判断を下すという言い方でなくて，主語述語で一つの心的状態を述べる，表象と同じになったものなのである。それで，事象を叙述してそれに体言性を与えたものでなくて，表象の体言化なのである。なお，「命の惜しさ」と違うところは，それは単なる概念であるが，「命の惜しい」はその情意が話手に現に存在するということを表現することである。

「概念」は叙述全体が体言化されるのでノ主語になるのであるが，第7表の助詞ナシ3例は次の

ような場合である。

100　人の用ゐつ捨てつする故は，貧なと宝ある（コト）による（金 247）

101　田舎の君ある（コト）は，都のないには劣るぞ（金 277）

助詞ナシの主語と述語とが一体になって，複合性状語のようになっている場合なのである。

準体言節は全体としては助詞ナシ・ガ・ノともに用いられるが，その内容を検討すれば第7表のようになって，準体言節が事象の叙述に重心があるものは助詞ナシが多く用いられ，省かれた被連体語に従属的であるものはノ・ガが多く用いられているのである。

F　主語と述語の隔たり

例46，47でも触れたように，主語述語が直ちに接する場合は，被修飾体言の統合力が強く及びがちで，ノ・ガになりやすく，連用語が間に入って述語部が長い場合は，被修飾体言の統合力が弱くなり，連体節は事象の叙述に重心が傾いて，助詞ナシになりやすい。第8表は主語述語の隔たりを，主語述語が直ちに接する場合，間に一語入る場合，二語以上入る場合に分けた用例数である。助詞ナシでは直接が25％，二語以上が47％であるのに対して，ノでは逆に直接が二語以上の7倍もある。被修飾体言の統合力の強い直接の場合はノになりやすく，反対の場合は助詞ナシになりやすいことがわかる。

第 8 表　主語述語の隔たり

	直　接	一　語	二語以上	計
助詞ナシ	72(25％)	78	134(47％)	284
ガ	93(50　)	50	47(24　)	190
ノ	257(73　)	60	38(10　)	355

IV　ガ　と　ノ

ガとノは次のような違いがある。

(1)　語によってガとノの付く語が固定しているものがある。一人称代名詞はガ，二人称代名詞のコナタ・ソナタはノ，ソチはガが付く。一般に固有の人名はガが付くが，尊貴の人はノが付く。例えばシャントはノ，イソポはガが付く。官位にはノが付く。尊敬を表わす接尾語「衆」にはノ，軽卑を表わす接尾語ドモ・メにはガが付く。非情意の物にはノが付く。尊卑感による使いわけと思われる。Ⅲで述べたように，助詞ナシの主語があるので，これは被連体語に従属的な連体節における主語の言い分けなのである。

(2)　しかし尊卑の別だけでなかったことはⅠで述べた。次の例もそうである。

102　関白程の人がこのやうな目にあはせられたことは（平 17）

103　関白殿の御参内あるに……入会はれた所で（平 14）

上例によれば，ノ主語は連体節の被連体語に対する従属性が強く，ノ主語の係る力が述語まででとまらない場合であり，ガ主語は，助詞ナシほどでないにしても，連体節は事象を叙述して独立的であり，主語は述語と対立して，係る力が述語まででとまる場合である。ガは既に終止文の主語に付くようになり，ガ主語の節はノ主語の節より終止文的になつていたのである。

(3)　「心ない」「情の深い」のような性質状態を表わす語は，助詞ナシが最も多く，ノガ次いで多

く，ガは稀である。複合する場合は，助詞ナシすなわち概念だけで複合するので，助詞ナシが多いのである。がその次に結合が緊密なのはノである。それで主語述語が融合して被連体語に強く従属する性状語では，ノが多いのである。そして，助詞ナシほどでないにしても主語述語が対立的であり，主語と述語が融合しにくいガは，性状語では稀なのである。

(4)　どの表でもガは助詞ナシとノの中間である。すなわち統合力の強い連体節ではノが多く，統合力の弱い連体節ではガが多い。

以上のように，ガは助詞ナシとノの中間であった。それは，終止文主語に付かなかった平安時代から，終止文主語に付いて連体語に付かなくなった現代への過渡期の姿だったのである。

なお，例102の「関白程の人が」はもとの平家物語では「摂政関白の」であったと思われる。もとの平家物語のノが，天草本ではガになっている例が多く，その逆は極めて少ない。もとの平家物語のノの領域が天草本ではガに侵されたのである。そして現代語と天草本と比べると，現代語のガの領域が，さらに広いのである。ノが従属的で，ガが終止文的であるという点は現代語も天草本も同じなのであるが，事象を従属的説明として把握するか，独立的完結的に把握するかという，把握の態度に変移があったのである。そうした態度の変移は，明治からこちらの短い時代にもあったし，個人の傾向差もあったのである。

註 (1)　ノについては，三宅清「人文科学研究16号」。ヲ咏嘆説については，小山敦子「国語学33号」その他多数。

(2)　主従説　山田孝雄博士。ノ連体語説　松下大三郎博士。松尾捨治郎博士「国語法論攷第四節」に紹介と批判がある。

(3)　平家の前半および「懺悔録」などは概念単位に綴つてあつて，経験と研究を重ねた後に文節単位（アクセント単位）に綴るようになった。モが離してあるのは初期の綴り方である。ココロ　アルもそうかも知れないが，金句集と比べると，「心ある」「心ない」の対比のために別綴りにしたものと思われる。

附記　本論の要点は昭和37年6月全国大学国語国文学会で発表したものである。